

令和6年度 学校自己評価システムシート （学校法人狭山ヶ丘学園 狭山ヶ丘高等学校附属中学校）

目指す学校像	21世紀を担う知勇兼備のリーダーの育成を目指す
--------	-------------------------

重点目標	1 教科指導の徹底と学力向上 2 基本的生活習慣の徹底 3 対話を重視し個々の人格を尊重した指導
------	--

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

出席者	学校関係者	18名
	生徒	0名
	事務局（教職員）	5名

学 校 自 己 評 価							
年 度 目 標					年 度 評 価（6月1日現在）		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	- 生徒が主体的に学ぶことができる授業への取り組みを更に充実させ、全員の学力向上を目指す。ゼミ、放課後の小テスト等を定期的に行い、確実な基礎力を定着させる。 - スタディサブリ動画教材の活用状況も含め、生徒の自学自習の習慣定着にはバラツキがあり、特に低学力層への指導に課題が残る。	- 全国レベルの模擬試験を通じて学力の推移を見守る。 - 定期考査の結果やその変化に着目。 - スタディサブリの活用状況に着目。 - 担当教諭とのコミュニケーションに着目。	- 教科担当者と学年団との共通理解を計り、きめ細かな指導を展開する。 - 学習の進め方指導や苦手教科の克服指導に工夫を凝らす。 - 学習方法の定着していない生徒に対して、放課後、自習室での学習指導を展開する。 - 英検の受験を促して、対策講座を通じて合格者の増加を図る。	- 模擬試験のG T Zの推移。 - 定期考査の結果や準備に取り組む姿勢。 - 英検の合格者数の推移。	- 模擬試験の各学年の平均点偏差値の上昇やG T Zの推移をみても全体的な学力向上はうかがえる。 - スタディサブリの活用には個人差が大きく出た。 - 英検の受験は多くの生徒がチャレンジしており、合格者も出ている。	B	- 様々な学力層に対する進路ガイダンスなどの学習指導を一斉に行うことへの困難さがある。習熟度別にガイダンスを実施するなどの工夫が必要。 - 自学自習におけるスタディサブリの活用を具体的に指導する。
2	生徒の登校状況、出席状況は概ね良好であるが、夜間のスマホ利用などで生活習慣を乱す生徒も散見される。	- 授業中や学校行事時の行動に着目。 - 登下校時のマナーを確認する。 - 生徒間のコミュニケーションのあり方に着目。	「生活の記録」を活用し、生活習慣を担任が把握。必要に応じた指導を展開する。 - 生徒間のコミュニケーションに問題があれば早期に指導する。	- 時と場所に応じて適切な言動が取れるかどうか。 - 挨拶の定着度。 - 規則正しい生活が出来ているかどうか。	- 学習の時間を確実に取れる生徒が増加している。 - 挨拶をしっかりと行う生徒が増えている。 - 公共の交通機関スクールバスでのマナーには課題が残る。	B	- 精神的な成長が十分でなく、周囲へ配慮の欠いた言動をとる生徒が若干いるので、今後も指導していきたい。 - 交通マナーについて指導する機会を増やす。
3	- 面談やH R活動、総合的な学習の時間、道徳の時間等で生徒理解を深めている。今年度も更に生徒理解を深め生徒指導に当たる。 - 黙想等の自己観察を通して、自己を省みる習慣を身につけさせる。	- ゼミや農作業への活動への取り組みに着目。 - 学校生活における言動に着目。	- 進路ガイダンスなどを通じて中学生が「学ぶ」意義について考察させる。 - 教科学習を通じて人間性の成長、向上につながることを理解させる。	- 学校生活全般に対する前向きな姿勢を有しているか。 - 学校行事に対して主体的に参加できているか。	- 体育祭、文化祭などの行事や農作業、日常的なグループワークなどでは協働して取り組む様子が多くみられた。 - 一方で諸行事への取り組みで指導を受ける生徒も散見された。	B	- それぞれの教育活動についての意義を理解させ、級友等と協調性をもって積極的に参加できるように指導する。 - 学年を超えたグループでの議論の機会を増やす。

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	令和7年6月28日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
- 英検については生徒全員に対して受検させるような指導は可能なのか。 - 英検の他にも漢検や数検も学校を会場として受検できたら良いと思われる。	
- 自転車の乗り方のルール、マナーについての指導は有難い。学校以外のところで守れるようになると良い。 「生活の記録」に基づく指導では担任の裁量の部分が大きい。学校、学年における指導の統一性が必要である。	
なぜ「難易度の高い学校・大学に行くのか」を子どもの気持ちに落とし込むことが難しいと感じる。「懂れる理由」「（この大学へ）行きたい」のイメージを持てるように指導してもらいたい。	